

「聴く」という表現 ―幼児の音楽鑑賞活動から考える学びの連続性―

幼児教育選修 服部 千紘

I 問題と目的

「表現」は保育における5領域にもあるように、子どもにとって非常に大切なものである。また、子どもに限らず“自分を表現する”ということは、生涯を通してとても大切な意味をもっている。現在の幼稚園教育要領にもその重要性が記されており、幼児期に培われた豊かな感性・表現力が、学童期以降へとつながっていくような保育が求められている。

しかし、「音楽」という点に関して言えば、小学校では、音楽の教科学習が始まることにより、児童の音楽による自己表現の機会が増えるが、幼児期にはあまりないように感じられた。

そこで本研究では、幼児の豊かな表現力を育む上で、音楽を「聴く」ことが重要な要素になるということを主張する。そして、幼児が身近にある音や音楽のよさや美しさを感じ取り、表現し、共有し合うという音楽的活動を通して、保育者という立場から、幼児の表現力を育むための援助を考えることを目的とする。

II 乳幼児の発達と音楽

(1) 聴覚の発達

乳児は生き物の鳴き声、葉っぱの色、手触り、匂いなどを、全感覚をもって識別し、味わう。このように子どもたちを取り巻く音環境は子どもたちの感性を育み、音文化を形成する上で重要な要素となる。このことに関しては、「幼児期において、音楽にかかわる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていくのである。」と幼稚園教育要領(文部科学省,2008)の中でも述べられている。また、園部(1970)は「乳幼児の発声、発語の能力は、自分が聴いた様々な音を断続的に繰り返し、自分が発音できる限りの音を組み合わせることで繰り返し模倣する体験を通して身に付くもので、それには、様々な音楽を『耳』を通じて聴く体験が必要である」と、聴く体験の重要性を述べている。これらのことから、子どもの音や声を伴った表現、また音楽を介した表現や身体運動を伴った豊かな音楽表現は、「聴く耳」すなわち「聴

く力」を育てることから始まると言えるだろう。

(2) 子どもにとって聴く活動とは何か

音で何かを表現するためにも、音による表現を受け止めるためにも、前提として表現手段としての音に耳を傾けて聴くという活動が必要である。特に5、6歳という年齢に着目すると、一人ひとりのものの考え方も様々で、個性がはっきりしてくる。そこで、ただ単に“同じ場所で同じ音楽を聴いた”ということではなく、一人ひとりが感じたこと、友だちに伝えたいことなどに目を向けられるようにしていく必要がある。それによって、子ども同士の関わりや、子ども自身の表現力がより豊かなものになっていくのではないだろうか。

したがって、子どもにとって音楽を聴くことは、子どもが音楽と関わる上で最も基礎的なことであり、情緒の安定や楽しむことを目的とするだけでなく、子どもの自由な表現を引き出すきっかけとなるということが言えるだろう。

III 鑑賞とは

(1) 音楽鑑賞と表現のつながり

学校教育における音楽鑑賞指導は、学習指導要領(学校における教育課程＝カリキュラム作成のための基準として文部科学省により示されているもの)において明示されている。平成20年度告示の『小学校学習指導要領・音楽』には、その教科目標として「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」ということが挙げられている。この文章からも分かるように、音楽の教科目標を達成するためには「表現」と「鑑賞」の双方の活動が相乗して目標を実現することが望ましいと考えられる。

また、小学校教育における「表現」は、子どもが自ら考え、判断して、自分のできること、良さや可能性を生かして創造的に表現する能力の養成であり、「生きる力」の基盤になる。この「生きる力」につながる教育であるということが、教科「音楽―表現」と保育内容「表現」の共通的な基本姿

勢であり、子どもの音楽表現を育てる上でもっとも大事なことだと考えられる。

(2) 幼児期における音楽鑑賞のあり方

子どもが音楽と関わる上で留意すべき点は、「子どもの発達」「環境」「聴かせ方」と考えられる。

子どもの発達

生まれて間もない赤ちゃんは、喜びや悲しみなどの感情を泣き声で表現する。機嫌が良いときには手を叩いて動き回ったり、メロディーのない歌詞を唱え、身の周りにおもちゃなどを使って音を鳴らしたりする。この時期には、そのような子どもの姿を「あせらず見守る」ということが大切である。なぜなら、子どもが音楽と関わる時、その表現を「受け入れる大人の存在」がとても重要になるからである。

環境

幼稚園教育要領、保育所保育指針において、いずれも「環境を通して行う」ことを保育の基本としており、人的環境・物的環境の重要性が示されている。人的環境としては、まずは保育者自身が音楽に興味をもち、音楽遊びを心から「楽しんでいる」という姿を見せることが大切になってくる。物的環境としては、さまざまな楽器を保育室に置き、子どもたちが手に取って触れることができるようにしたり、子どもたちが聴きたい曲を選んで聴けるように、CDデッキを操作できる工夫を施したり、さまざまなジャンルのCDを置いておくということも工夫として挙げられる。このように、環境を通して子どもがより楽しく音楽と関われるよう、保育の質を高めていくことも大切だと考えられる。

聴かせ方

子どもたちには、できるだけ多くの機会に、多様な音楽を聴く経験が必要だと言える。なぜなら、世界中にはさまざまな音楽が存在し、子どもたちはそれらに触れることによって何らかの刺激を受け、その音楽や、背景にあるものについてやがて関心をもつようになるであろうと考えられるからである。

保育の中では、一年間の行事などを通して偏り

なくできるだけ多くの音楽に触れられる機会を作るようにする。また、既成の曲だけでなく、子どもたちの身の回りにある様々なものを使って音を鳴らしたり、自然の音を聴くなどによって、「音に耳を傾ける」ことが楽しいと思えるような援助をしていくことが、音楽の「聴かせ方」という点において大切なことだと考えられる。

以上の3点に留意し、本研究の核となる「幼児の豊かな表現を育む音楽活動」を考案した。

生活発表会に向け、色々な楽器を使った「発表会ごっこ」を楽しみ、楽器や音色に興味をもっている子どもの姿より、明快で、様々な楽器の出でくる曲が相応しいのではないかと考えられた。1曲あたりの長さは、幼児の集中力や、このような音楽活動を初めて行うということを考慮して2分以内とし、且つその中で曲調に変化がある曲を選曲した。

活動時の言葉がけについては、幼児自身のイメージを率直に表現させたいため、保育者側から子どものイメージに影響を与えるような言葉がけは行わないものとした。また、他の子どもと保育者の会話から受ける影響を極力減らすため、聴き取りは別室で行うものとした。

IV 幼児を対象とした調査

(1) 調査の概要

これまでに得られた知見から、日常の遊びの中で音楽を聴く活動を取り入れることによって、幼児の豊かな表現力を育むことができるのではないかと考えられた。そこでそれを実証するための教育実践として、音楽から受けた印象を色で表現するという表現活動を考案し、幼児を対象とした調査を行った。また、本研究では“遊び”として、音楽を聴く活動を保育の中に取り入れることを想定している。そのため実践に際してできるだけ自然な子どもの姿を見るため、日々の保育とのつながりを考慮して行った。

〈事前活動〉

活動に入るための前段階として、別日に、遊びの中で様々な音に対する興味・関心をもち、色・音・感情の3つを結び付けられるような音楽遊びを行った。

調査期日：2014年11月21日 午前10:00～10:50
 調査対象：年長児21人（男児10名 女児11名）
 調査方法：音楽を流し、聴いた印象を画用紙に色
 で表現させた。その後、子ども一人
 ひとりに聴き取り調査を行った。
 準備物：各園児所有の16色のクレヨン
 白画用紙(八つ切り画用紙の半分)1人2
 枚ずつ
 使用曲：(1)サン＝サーンス作曲
 組曲 動物の謝肉祭より『化石』(1:13)
 (2)ムソルグスキー作曲
 交響曲『禿山の一夜』(1:30)
 記録方法：保育室内にビデオカメラ1台を設置し、
 全体の子どもの様子を映像で記録し
 た。またハンディビデオカメラを用い
 て、一人ひとりの子どもの様子を記録
 した。

(2) 結果と考察

●子どもは何を描いたか

子どもが描いた絵は、大きく①楽器の絵を描いたもの、②丸・線・塗りつぶすなどの抽象画、③聴いた音から連想した具象画、の3種類に分けられた。

次に、子ども一人ずつの絵を『化石』と『禿山の一夜』で比較したところ、描き方や色の使い方などに共通点が見られた子どもと、2枚の中で変化が見られた子どもがいた。そこで、2曲間における一人の子どもの中での絵の変化を、以下の4つにグループ分けをした。

【表5-4】 一人の子どもの中における絵の変化

	1曲目⇒2曲目	子どもの人数(人)
①	抽象⇒抽象	13
②	抽象⇒具象	5
③	具象⇒抽象	3
④	具象⇒具象	0

①2曲とも抽象画を描いた

2曲とも抽象画で描いた子どもは全部で13人おり、線・点の描き方、表しているものなどでその子なりの特徴が見られた。

②抽象画から具象画へ変化した

5人の子どもは共通して、『化石』の時は「楽器

の音」に着目し、楽器の種類で色分けをしていたが、『禿山の一夜』の時は「楽器の音」に着目してはいたものの、音から連想されたものの絵を具象化して描いているという特徴が見られた。また、『化石』の時に比べ、『禿山の一夜』では、色や音に関する発話内容が具体化していたことより、より具体的なイメージやストーリーが頭の中に浮かんでいたのではないかと推察された。

③具象画から抽象画へ変化した

『化石』の時には「楽器の音」に着目していたが、その発話内容にストーリー性や具体性は見られず、「鉄琴の音がした」「ピアノとギターみたいな音もした」「楽しいから音符を描いた」というように“音色”というよりは“何の楽器の音が鳴っているのか”ということに着目していた。しかし、『禿山の一夜』の時には、『トウトウトウン!』って音が鳴ってた」「サラサラの音がいっぱい聴こえた」「(音が)ギザギザしてた」というように“音色”を感じている発言があり、楽器の種類だけでなく、より細かい音楽的要素に耳を傾けることができていたのではないかと推察された。

子どもの描き方や色の使い方などにおいて、その子どもの中での同質性は見られるものの、どの子どもにも2枚の絵において変化が見られた。このことより、“聴く”という活動を繰り返し経験するにしたがって、「何を聴くのか」という自分なりの視点をもつことができるようになり、次第により豊かに音楽を聴くことができるようになるのではないかと推察された。

●子どもは何を聴いていたのか

聴き取り調査の際、“何を描いたのか”など、自分の描いたものの様子を話す子どもの発話内容は、子どもが音楽を聴いていた際の着目点が基になっていると考えられた。

そこで、聴き取り調査の際の子どもの発話より、音楽的要素もしくは心情を表すキーワードを抽出し、分類した。その結果、子どもは楽器の種類、音の高さ、音色、曲の雰囲気、旋律の動き、リズムなどに着目していたことが分かった。

『化石』を聴いたときは、多くの子どもが楽器の種類に興味をもち、楽器の絵をそのまま描いたり、楽器の種類で色分けする様子が見られた。し

かし、『禿山の一夜』を聴いたときは、楽器の種類だけでなくその音色や曲調の変化にも耳を傾け、曲のイメージを自分の記憶や経験、身近なものに結びつけて表現する子どもが多かったということが、聴き取りの内容から読み取ることができた。子どもが描いた絵と聴き取り調査の内容だけでは、実際に音楽を聴いているときに子どもが着目していたこと全てを把握することはできないが、少なくとも、“どう色分けしたか”“(線や点などで)何を表しているのか”という子どもの発言から考えると、活動の回数を重ねるごとにより細かい部分まで耳を傾けることができるようになっていったのではないかとということが考えられた。

子どもの中にはストーリーを考えた子どももあり、いずれも「聴いた曲から受けた印象を自分なりのイメージに変換し、表現する」という過程が見られた。また、“頭の中で聴こえる音”を語った子どもがおり、この“頭の中で聴こえる音”は今までの経験やその時の気分、その子ども自身の考え方や感じ方などが影響するものであり、「聴き方」にもその子どもなりの個性が表れるということが分かった。

V 本研究のまとめと今後の課題

(1) 本研究のまとめ

本研究を通して、子どもの表現と向き合う際に保育者が心がけておくべきこととして、「子ども一人ひとりの表現を受け止めること」、「領域『人間関係』との関わりを考えること」、「意識して『聴く』こと」という3つの視点が大切であることが明らかになった。

そして、感覚の鋭敏な幼児期に、「音楽を聴いて表現する」という活動を取り入れていくことによって、それぞれの子どもの表現力の豊かさや、今後の音楽との関わりをの基盤が育まれていくことにつながるということが言えるのではないだろうか。そこで保育者・教師に求められるのは、子ども一人ひとりの聴き方をどのように保障し、認め、そこから子どもの表現を個別に伸ばしていけるのかを模索していくことだと筆者は考える。そのためには、保育者・小学校教師が共通して「一人ひとりの子どもの表現を大切にすること」という姿勢をもつことが大切であると言える。

また、初めは音楽鑑賞においては、自分の思いを言葉にして外に出すことが「表現」だと思って

いた。しかし調査を進めていくうちに、必ずしも言葉にして自分の外へ出すことだけが「表現」なのではないと感じた。たとえば言葉で表すことができなくても、その人が「何を、どのように聴くのか」ということは、内面的・主観的なものがもたになっており、この“意識的に聴く”こと自体が「表現」になっていると考えられた。音楽鑑賞を通してより豊かな表現力を育むためには、まず一人ひとりの感じ方を大切に、音楽を自由に味わって聴くことが必要である。

したがって、本研究を通して学んだことを参考に、私が今後保育現場に立つ際には、音楽を「楽しい」「怖い」という大まかな解釈でまとめるのではなく、子どもと一緒に音楽の面白さを感じ、子ども一人ひとりの感じたことを大切にしていきたい。

(2) 今後の課題

本研究では、「音を色で表現する」という活動を行ったが、事前活動として、「音さがし遊び」を通して音と色をつなげられるような活動を行ったり、簡単な音楽鑑賞を行った。このことによって、子どもたちは音楽と色、感情を結び付けることができたのではないかと考え、段階を踏んで活動を取り入れていくことの必要性を強く感じた。しかし本研究では、部分指導案作成に留まり、一年間を通した活動計画や、その際の具体的な子どもへの配慮については、追求することができなかった。したがって、今回の研究結果を保育現場で活かしていきながら、今後さらに、子どもが音楽を楽しみ、のびのびと表現することができるように、一人ひとりに合った援助とは何かを模索していきたい。

参考文献

- ・文部科学省(2008)『幼稚園教育要領 解説』フレーベル館、p.158-159,165,263
- ・三井真希(2009)「第10章 聴く活動」石井玲子編著『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』保育出版社、p.135
- ・園部三郎(1970)『幼児と音楽』中央新書 p.23
- ・文部科学省(2008)「音楽編」『小学校学習指導要領解説』教育芸術社、p.7